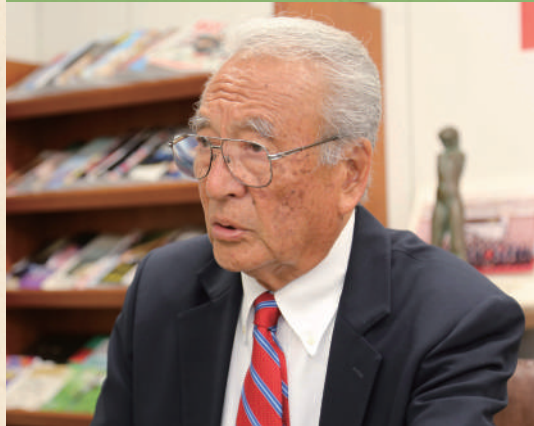


# 理事長 PART 対 1 談



## 奥山 忠先輩

Tadashi Okuyama

東京JC 1974年度第25代 理事長・  
東京JC日中友好の会 最高顧問  
株式会社東京ニュース通信社 相談役

### 踏み出すのが怖くても大事なのは、 向こうへ飛び込むことだ

**塩澤** 今回は、昔のJCは非常にダイナミックだったという話を。

**奥山** 僕、中国問題やったでしょう。でも、最初は中国のことなんて全然知らなかったんだ。日本はアメリカの同盟国で、当時は中国と友好関係を結ぼうという考えは全くなかった。僕が副理事長の時に「国際問題をやれ」となって、その一年前の1972年に田中角栄さんと大平正芳さんが中国に行ったことから日中友好運動をやったこと。国際委員会の委員長が社会党青年部の団体の一員として

行ったんだ。「東京JCが来た」と特別待遇されて、「ぜひ来年は東京JCの皆さんに来て欲しい」となった。「経済人が来た」と思っているんです。東京青年会議所には経済人の息子が多いから。向こうで大歓迎され、意気揚々と帰って来て「来年行きましょうよ」と僕に報告したんだ。翌年、僕は理事長になったけど、6月に中国へ行くことになった。外務大臣だった大平さんがまず周恩来、当時の中日友好協会の会長の廖承志さんに手紙を書いてくれて。廖承志さんは、早稲田

大学卒で日本語が上手く、いわゆる江戸弁で我々20人に話をしてくれたんだけど「これが中日友好協会の会長さんか」と皆惚れ込んで、この人の言う通りにやっていたら間違いなくなった。その時に紹介されたのが胡啓立さん。「この男が将来の中国を背負って立つ男だ。親しくしておいたら間違いないよ」と紹介されたら中日友好協会の会長になった。

**塩澤** 出発前に東京JC内でも何か言われましたか？

**奥山** 「共産党の国と日本がなぜ付き合うんだ、何考えてるんだ」と言われた。でも「共産党の国で今は貧乏だけれど、とんでもない国になるんです」と僕は言うて。行ったら先輩方に怒られるのを承知で行った。そして大評判で、JC新聞だけでなく一般紙にも記事が載ってインタビューされたりしました。そんな先輩も次の訪中団で一緒に行ったら「中国はいな」って。

**塩澤** 未知の怖さなどがあっても将



来、絶対に中国と付き合う流れになるだろうと、たくさん調べた所などが行動力になったのですね。中国もそうだったと思います。が、現役が新しいチャレンジをする時に、怖くて踏み出しにくい最初の一步を踏み出したのはなぜでしょうか？

**奥山** 大事なのは、向こうへ飛び込むことだね。だからまずは相手の名前を覚えて名前をお呼びする。こちらの方がずっと親しく感じる。「なぜかその人なら相談したくなる」という気持ちにさせなきゃだめだと思う。ともかく相手の立場になって考えることですね。  
**塩澤** 先輩のように怖いという気持ちや断ち切って、思い切ってやるのが大事ですね。